

論文審査の結果の要旨

論文提出者 宮坂真紀

本論文は、18世紀のヴェネツィア出身の台本作者カルロ・ゴルドーニが喜劇の中でイタリア語とヴェネツィア方言をどのように使い分けていたのかを明らかにし、この言語の選択の問題をゴルドーニの作劇術に結びつけることによって、ゴルドーニの喜劇の解釈に新たな視点を提示することを目指したものとして位置づけることができる。

また、20世紀後半以降の研究が18世紀ヴェネツィアの歴史的環境を重視して社会的批評（市民生活とヴェネツィア社会の結びつき）が主流になっているのに対して、文学的な作劇術に注目する視点から解明しようとする挑戦的な意欲作としても評価できる。

さらに、ゴルドーニの喜劇の中でヴェネツィアを舞台にしたものは意外に少ないという事実には焦点をあてたことは特筆される。舞台をヴェネツィアの外に置く場合も、イタリア語を使用することで、検閲を避けたり、モデルの存在を曖昧にしたりするための便宜的方便に過ぎないと見なされてきたにすぎない。しかし、著者はこのような便宜的理由だけによる舞台設定に疑問を呈し、テキストを丹念に読み込むという作業に取り組んだ。それによって、言語の選択という文学的視点から接近したことは独自の説得力をもっている。

このような分析を進めるとともに、イタリアにおける「イタリア語」、「方言」という概念の起源や、その実態、イタリア語のあり方をめぐる言語論争の経緯についても、十分な目配りがなされている。また、各喜劇の台本出版の際に付された序文を分析しながら、ゴルドーニの認識の変化に応じて作劇上の二つの言語の扱い方を時間の経過に沿って論究しているのも特筆される。とくに、上演台本を出版物として定着させる過程での方言の扱いや、喜劇の科白を通して示されるイタリア語やヴェネツィア方言の位置づけ、特徴、話し手との関係などを明らかにした点は納得させるものがあった。

また、ゴルドーニの喜劇が最も充実した時期とされる1760年前後の3年間の喜劇では、とくに、イタリア語の話し手として、家父長制度の中で精神的に自立する女性たちに注目したのも独自の視点として評価される。彼女た

ちは啓蒙主義による影響のなかで創造され、思想表現の手段としてイタリア語が選択されたことには必然性があると説得的に指摘している。

このような鋭利な分析を通して明らかになったイタリア語とヴェネツィア方言の位置づけを踏まえた上で、言語の選択は舞台設定に伴う便宜上の手段ではなく、言語と話し手の性格との均衡に基づき、作劇上の必然性からなされた点を解明したことは本論文の大きな功績である。また、これにより先に示した舞台設定の問題を見直すと同時に、喜劇における言語の選択の問題がゴルドーニの作劇上、重要な意味を持つことが明らかになり、それも本論文が独自に開示したことである。

もちろん本論文にも、いくつかの欠点が指摘された。ゴルドーニ以前の劇文学の科白における、話し言葉としてのイタリア語と比較する視点が希薄であること、また、引用した喜劇が書かれた状況を理解しやすくするための上演データなどを詳しく示すべきこと、さらに、ゴルドーニ研究の主流である「社会学的」批評に対し、言語を扱う本論文の方法を「文学的」批評と表現しているが、その定義が曖昧であること、などがあげられた。

しかしながら、これらの疑問はあるにしても、それらは本論文の全体的評価をいささかも損なうものではないことは審査委員すべてが認めるところであった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。